

展 望

第二十七回国際宗教社会学会トリノ大会に参加して

田 島 忠 篤

第二十七回(SISR/ISSR) 国際宗教社会学会が「宗教と世代」というテーマで七月二十一日から二十五日までの期間、イタリアのトリノで、開催された。この学会の大会は、二年ごとに開催され、四年前の一九九九年、ベルギーのルーバン大学の大会では、創立五〇周年が祝われた。前回は二〇〇一年に、欧州、北米以外の地では、初めて、メキシコで行われた。

既知の方もいると思うが、この学会は、「国際」(International)といっても、ヨーロッパ中心の学会であり、メンバーも開催地も従って欧州が多い。また、成立時の経緯から、学会の公式言語が英語とフランス語という、ユニークな学会でもある。勿論、大会当日のパンフレット、司会進行など両国語で運営される。英語の発表の後にフランス語の発表が続く、英語の発表に対して、フランス語で質問が出され、司会者が英語に翻訳して、発表者に伝えてから回答が出される。すると、今度は、フロアーの誰かが自発的にフランス語に翻訳する、という光景が見られる。冒頭に本学会の特質について、少し話したが、本稿では、まず、はじめに、テーマおよびセッションにつ

いて述べ、次に、日本関係者の発表に触れ、最後に若干の著者の感想を述べて、大会報告としたい。

「宗教と世代」というテーマが選出された理由として、今回の大会で任期満了となったイギリス・ワーウィック大学のジム・ベックフォード会長から、(1)発表内容への汎用性が高いこと、(2)これまでの学会、大会で取り上げられて来なかったテーマであること、が示された。しかし、テーマに関する本会議(プリーナリー・セッション)では、アメリカにおけるアフリカ系宗教、カリブ海の民俗宗教、ホメイニ没後のイスラム教について世代を軸に分析していたが、世代と宗教に関する一般的な理論を目指すまでには行かず、事例報告集の感が脱しきれなかった。汎用性の高いテーマだけに、異なった社会背景や文化圏でのセッションでは、議論が拡散していた。

しかし、世代に関する面白い研究として、印象に残ったものを二つ記すと、その一つは、旧社会主義圏での世代による宗教意識の差に関する調査研究である。ソ連崩壊後、ロシアでは、正教(オーソドックス)の教会が増え、受洗者が増加しているが、青年層の宗教に対する意識が、親世代に比べて、より多元的な価値を認める傾向にあることを報告していた。ルーマニアでも、また、同様の傾向が報告されていた。同一部会の異なる発表であったが、社会主義的価値観およびその体制が崩壊した後に社会化された青年層世代と崩壊前に社会化され、アノミー状態を経験した親世代という共通点があった。ロシアとルーマニアと異なる国状ではあるが、世代を通して社会変動と宗教意識の形成に関する分析ができることを示唆していた。また、イ

ギリスのワーウィック大学プロジェクトで新宗教と教育に関する研究が筆者の関心を引いた。イギリスにおいてヒンドゥー系新宗教が創立した大学などで世代を超えて如何に自教を教育していくかが報告されていた。これら新宗教の改宗第一世代の信仰を次世代に継承する際、教育機関を通して実施する点に関して、日本の宗教教育を考える際の参考になると、筆者の興味を引いた。

さて、日本関係の研究者について、今回は、十二名の発表者と一名のコメンテーター、計十三名が参加し、これまでにない大規模の参加となった。敬称を略させていただき、氏名および所属、発表部会、発表題目の順に紹介すると、安蘇谷正彦（國學院大學）は、「日本とアメリカの宗教」部会で、「神道の伝統と世代」について、中野毅（創価大学）は、「宗教と政治——超越から内在へ」部会で、「日本における仏教（徒の宗教）」による新しい形の政治参加」を、奥山倫明（南山宗教文化研究所）は、「宗教的多元主義——比較の視点から」の部会で、「宗教多元主義時代における神道神社——靖国神社の事例」を、Maria Signorini（東京大学）は、「ニュー・ファミリーと宗教」部会で、特に、「ニュー・ファミリーと宗教——日本におけるニュー・ファミリーと儀礼的正統化」を、それぞれ発表した。「現代社会における私的、公的慰霊儀礼」の部会では、栗原淑江（東洋哲学研究所）が、「現代日本における葬送儀礼の変容について」、また、同研究所の栗津賢太は、「現代日本の状況における記憶のハイブリッド性と戦争の記憶」について報告した。また、「セクトと新宗教運動（New Religious Movements）」

の部会では、稲場圭信（神戸大学）が「新宗教運動への改宗——ジーザス・アーミーとフレンズ・オブ・ウェスタン・ブツデリスト・オーダーの事例について」、そして、筆者が「農村——都市移住者の新宗教と次世代の新新宗教」について報告した。この部会では、ブライアン・ウイルソンの「十九世紀と二〇世紀における千年王国運動とセクトの形成」についての発表も予定されていたが、大会前日に体調を崩され、イギリスに帰国し、参加できなかったことは惜しまれた。

今回の大会で日本関係者の発表で注目すべき点として、上記の半分にも含まれているように、日本の中堅研究者たちが多く参加していることである。開催者主催のパーティでも、物怖じすることなく、欧米の研究者はもとより、トルコ、インド、メキシコ、ブラジルからの研究者とも積極的に会話をしている姿が目立った。その積極性の中でも、特に、「日本の比較的若い世代の生死観」という部会を積極的に立ち上げたことは、評価されよう。その部会では、弓山達也（大正大学）が「生命主義的救済観の再考」を、伊藤雅之（愛知学院大学）が「日本の大学生の死と死後の世界に対するイメージ」を、小池靖（日本学術振興会特別研究員）が「日本のセラピー文化における死」を、そして、最後に、樫尾直樹（慶應義塾大学）が「現代日本青年の死への情熱と観念——漫画バガボンドの読者を通して」を発表し、岩井洋（関西国際大学）がコメンテーターをつとめた。どの発表も現代日本の生死観を解く、発表であった。しかし、一つには、発表時間帯の問題、もう一つは、ヨーロッパ中心の学会であるためか、興味を持つ人が少なかったのが残念で

展 望

あった。オウム真理教事件を受けて、一九九七年の第二十四回トゥールーズ大会で、日本人研究者による日本の新宗教について映像を交えながら部会を開いたが、その時も興味関心を示す欧米の研究者は少なかった。ヨーロッパ中心の学会だから仕方がないのであろうか。

本報告の最後として、筆者の若干の感想を述べてみたい。開催地がイタリアであることからか、中南米、アフリカ、中近東、アジアからの研究者の参加が少なかった。特に、日本の位置する東アジア（中国、台湾、韓国）からの参加者は、日本以外は、今回も皆無である。ヨーロッパ中心の学会から名実ともに世界学会になるためには、やはり中南米、アフリカ、中近東、アジアからの参加は必要である。そのためにも、日本の近隣諸国の研究者が参加することを切に望む。

近年、日韓の宗教研究者の交流が盛んに行われている。こういった二国間の交流を基礎に、さらに、中国や台湾などとも交流も深めていく必要がある。東アジアには、ユダヤ、キリスト教、イスラム教とは異なる、仏教、儒教、道教といった共通の宗教文化を持つ背景がある。そして、これらの諸国で興った、または興りつつある高度経済成長による社会変動も時間差はあれ、「遅れてきたものの近代化」として共通性がある。東アジア全体で、戦後の産業化・近代化と宗教に関して、何か、共通の課題や有効な分析概念が見出せないか、そして、それをもつて、再度ヨーロッパ中心の学会と「対話」ができないものだろうか、そんなことを帰りの飛行機で考えた。次回のSISR／ISSRの大会は、二〇〇五年七月、クロアチアの首都ザグレ

ブで開催される。また、この年の三月には、IAHRの大会が三月に東京で開催される。それまでに何か東アジアの研究者で共通の研究課題を見つけ、プロジェクトができないか、そんなことを思いながら帰国した。